



# 赤トンボの 羽化を見ませんか

堀井 修 (新潟県小千谷市)

赤トンボの9割が田んぼで生まれ、  
夏は山で過ごすことをご存じですか？  
知らない？ それでは6月の新潟の田んぼにご案内します。



## 赤トンボ誕生のドラマ

あたりがようやく薄明るくなってきました。時は昨年6月18日の朝5時——。田んぼの水面からイネの茎を伝ってヤゴが顔を出し、なおもゆっくりと登って行きます。動きが止まるとやがて背中が割れだします。割れた背中から、妖精のような白いトンボが、時間を忘れさせるほどそろそろと頭を出し、胴体を出し、しっぽを出して、しわくちやの白い弱々しい羽を、スローモーションのようには広げていきます。6時、ヤゴの形からようやくトンボの姿に変身を完了しました。おめでとう。

しかし、赤トンボはまだ生まれただけです。東の空に上ったばかりの朝日は、夏至が近いといえども、まだまだその力を発揮できません。羽が乾くまで1時間はかかるのです。中には途中で力尽きて水面に落ちてしまうもの、クモの巣に捕らえられてその栄養になってしまうもの……、いろいろあります。

ようやく羽が乾きました。これから彼らは山をめざし飛び立っていきます。

そこに現われるのは田んぼの上を低空飛行するツバメさん。ツバメは2回目のヒナを孵化させました。ヒナ鳥はいくら親がエサを与えてもピーピーと催促します。この時期の赤トンボは、親鳥にとってはまたとない子供のエサです。器用なツバメは一度に3匹も赤トンボをくわえてヒナに運びます。

これらの難関を突破したトンボは、昼が過ぎる頃に山

### 赤トンボの羽化の様子 (コノシメトンボ)



胸部の背が割れて、成虫の胸部が現われる



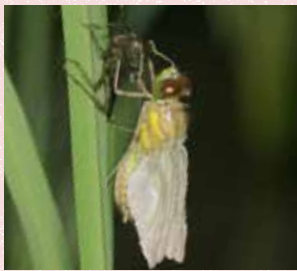
頭が出る



腹の先を残して反り返り、全体が現われる



しばらくすると腹筋を使って起き上がり、前脚で殻につかまり残りの腹部を引き抜く



縮こまっていた羽が少しずつ伸びる



伸びきった羽が透明になり、腹部が伸びる

写真=久野公啓

に向かいます。そして夕方には、田んぼにトンボの姿は見えなくなります。夏のあいだ山で修行した彼らは、イネ刈りの頃、赤く日焼けをして再び田んぼに下りてきて産卵し、一生を終えるのです。

#### 開催日を決めるのが難しい

新潟でも赤トンボは少なくなつたといひます。しかし、消費者の求める安全安心なお米に因るために、農薬と化学肥料を控えた「減減稲作」の栽培が大半を占めるようになり、少しずつ復活しつつあるようです。

私たち「にいがた有機農業推進ネットワーク」は、消費者の皆さんに「赤トンボの羽化を見ませんか」と呼びかけています。毎年6月20日前後の土・日曜日の朝8〜

9時頃。年によって変わりますが、県内数カ所で羽化の見学会を開いています。たいいていのトンボは羽が乾いてよたよた飛び回る時間になりますが、中にはとぼけたトンボもいて脱皮の最中ということもあります。

とはいえ、赤トンボは土曜日曜に合わせて羽化してはくれません。ネットワークではもう4年くらい見学会を呼びかけていますが、羽化の最盛期をピタッと当てるのは大変難しいことを知りました。

専門家にいわせると、田んぼに水を入れて代をかくことによつて卵が孵化してヤゴとなり成長を始めるのだけです。だから新潟でも平地ではゴールデンウィークの頃から卵がかえり、代かきの遅い山間地のトンボはそれよりも半月は遅れるようです。